

小森陽一

文体としての物語

文体としての物語

筑摩書房

小森陽一（こもり・よういち）

昭和28年，東京に生まれる。昭和51年，北海道大学文学部卒，同大学院博士課程修了。日本近代文学専攻。現在成城大学助教授。

文体としての物語

昭和六十三年四月三十日 第一刷発行
昭和六十三年九月一日 第三刷発行

著 者 小森陽一

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 東京二九一七六五一（営業）

東京二九四一六七二一（編集）

井村印刷・多田印刷 矢嶋製本

© Y. Komori 1988 Printed in Japan

ISBN4-480-8224-5 C1095

目 次

物語としての文体／文体としての物語

3

I

文体としての自己意識 21

——『浮雲』の主人公——

『浮雲』における物語と文体 58

表現の理論／物語の論理 96

II

結末への意志／結末の裏切り 127

——嵯峨の屋おむろにおける物語と表現——

結末からの物語 163

——「舞姫」における一人称——

人称的世界の生成 195

——鷗外ドイツ三部作における文体と構成——

III

独白の系譜

225

——広津柳浪の初期作品を中心に——

口惜しさと恥しさ

254

——「たけくらべ」における制度と言説——

囚われた言葉／さまよい出す言葉

264

IV

「こころ」を生成する心臓

293

〈読む〉ことへの夢想

318

あとがき

351

初出一覧

354

文体としての物語

物語としての文体／文体としての物語

一

あらゆる文学表現は、必ずしもその表現をつくり出した、個人あるいは個性としての表現者に帰属するものではない。もちろん、あえて言葉だけで構築した世界を、自分の表現として選びとろうとする個体には、そうせざるをえなかった個別の事情や理由、意欲や執着があることは事実だ。

しかし、新たなテキストが、それまでの諸テキストの引用を基礎に成立する織物であるとするなら、現象している文学テキストは、必ず引用された諸テキストがかつて内包していた物語（あるいは諸物語）と、それを引用するテキストがこれから作動させようとする物語（諸物語）とが、縦糸と横糸とのようにならみあいながら織りなす生地であると同時にそこに浮き出る文様だ、といえる。

「近代文学研究」のこれまでの歴史は、文学テキストにおける表現が個性的であることを重視し、類型的であったり、日本文学の伝統的諸ジャンルからの影響を受けていることを蔑視してきた。逆に、西欧の思想、西欧の作家や作品からの影響を、あたかも「近代」の基準のように、無前提に、ある表現を評価する軸にしてきたといえよう。

けれども異なる諸テキスト相互のかかわりを、「影響」として捉えている以上、そこには何ら意味生産的なダイナミズムはあらわれてこない。「影響」という発想は、常に主体となる作品と従属する作品、実体と影といった、支配と被支配の関係をテキストとテキストとの間につくり出す。そのような形で、日本の「近代文学」は「自我」や「私」といった概念を筆頭に、「西欧的近代の未発」という烙印をおされて来た。

もちろんここで、日本の文化の西欧に対する独自性や優位性といった、どこやらの「日本文化主義者」のような主張をするつもりはない。そうした発想は、対欧米を意識した「日本主義」である限りにおいて、アジア諸国をはじめとする諸文化を、結局は「文化」の範疇から切り捨てていく、「脱亜入欧主義」の一変種でしかないのだ。しかし、その問題にここで深入りすることはできない。

重要なことは、あらゆるテキスト間における、デモクラティックであるがゆえに、きわめて緊張した相互関係なのである。ある新しい表現を現象させているテキストは、必ず先行あるいは同時代の諸テキストと厳しい葛藤をくりひろげている。その動態にこそ、そしてまた相互関係のあり方にこそ、表現者の個性があらわれてくるのである。個性とは実体ではなく、運動なのであり、葛

藤する力関係なのである。

ここに二葉亭四迷の『浮雲』第一篇における、最も「近代」ではないと見做されてきた表現がある。

「アラ月が……まるで竹の中から出るやうですよ 鳥渡御覧なさいヨ

庭の一隅に栽込んだ十竿ばかりの織竹の葉を分けて出る月のすゞしさ〔第一文〕 月夜見の神の力の測りなくて断雲一片の翳だもない蒼空一面にてりわたる清光素色唯亭々皎々として雫も滴たるばかり〔第二文〕 初は隣家の隔ての竹垣に遮られて庭を半より這初め中頃は椽側へ上ツて座舗へ這込み稗蒔の水に流れては金激澗、簾馬の玻璃に透りては玉玲瓏、座賞の人に影を添へて孤燈一穗の光を奪ひ終に間の壁へ這上る〔第三文〕 涼風一陣吹到る毎にませ籬によるぼひ懸る夕顔の影法師が婆娑として舞ひ出しさては百合の葉末にすがる露の珠が忽ち螢と成ツて飛迷ふ、艸花立樹の風に揉まれる音の颯々とするにつれてしばしは人の心も騒ぎ立つとも須臾にして風が吹罷ればまた四辺蕭然となつて軒の下艸に集く虫の音のみ独り高く聞える〔第四文〕、眼に見る景色はあはれに面白い〔第五文〕

これは文三とお勢の、人情本的な恋の発端が場面的に語り出される導入部である。第二回では、語り手によって作中人物の外側で、読者に提示されていた文三とお勢との関係が会話場面として描

かれるところであり、お勢に心中の恋心を告白しようとする文三がそれをなしえず、絶句しながら彼女とともに庭にかかる月をながめる場面だ。坪内逍遙の回想（『二葉亭の事』『柿の蒂』（昭8）所収）などを考慮に入れるなら、二葉亭が第一回で導入したいいわゆる「言文一途」的な地の文のあり方に對し、地の文は「雅俗折衷」にすべきだという立場だった逍遙の助言がかなり入ったところだといえよう。また逍遙の言う、「漢文くづしか、和文くづしか、戯作文かしき無く、而も其三つとても、あんまり自由には使ひこなせないといふ苦しみ」が、如実にあらわれている部分だともいえる。

しかしここには、明らかに物語を作動させるために選ばれた文体と、これから動きだそうとする表現者によって構想されている物語との、鮮やかな葛藤、あるいは對決を読みとることができる。

引用部の第一文は、庭の竹の間から出る月を描いているが、その竹は「織竹なやたけ」という、よく知られた歌語によって表現されている。この一語に引き摺られるようにして、テクストには、和歌のジャンルの記憶が浮上してくる。

竹を言葉で捉えるには、多種多様な選択の可能性がありうる。その可能性の中から、あえて「織竹なやたけ」という歌語を選ぶことによって、『浮雲』という言説におけるこの部分の発話の位相が決ってくる。あらゆる言葉は、それが特定の発話のなかに現れてくる以前は、他の言葉たちと類似と差異との関係性の中で結びついている。「織竹なやたけ」という歌語を選択したということは、そうした連合関係（paradigm）において、和歌的な記号とのつながりを浮上させ、逆に他のジャンルとのつながりは切ることになる。

その結果、結合関係 (syntagm) においては、「なやたけ織竹の」(五音) という語を中心に、その前が「うもこ裁込んだ」(五音)、「と十竿ばかりの」(七音) となり、後が「葉を分けて出る」(七音)「月のすゞしさ」(七音) というように、五・七・五・七・七の和歌の音数律によって統辞されることになる。

このように第一文は明らかに、和歌的な文体として析出されるわけだが、「織竹」の連合関係への触手は、同時にある物語線を引き寄せもする。言うまでもなく「なよ竹のかぐや姫」の物語である。この点については篠田浩一郎が興味深い比較研究を行っているが(『浮雲と竹取』)、月の審美的描写は、ただ描写だけではなく、その中にすでにある物語線を胚胎させているのである。

もし「竹取物語」における貴公子たちの求婚譚を、ジャンルの記憶として重ねあわせるなら、ここで文三のお勢への求愛は、決して実現しえぬものとして、宿命づけられてしまったともいえる。

第二文は、「月夜見の」(五音)「神の力の」(七音)「測りなく」(五音)までは、和歌的文脈が残存している(記紀神話の記憶も作動)。その後は「断雲一片」「清光素色」「亭々皎々」といった、漢詩文的表現が導入されることで、和歌的文脈は崩れていく。文の統辞機能においても、和歌の音数律ではなく、「漢文くづし」の統辞に近づいていく。いわば伝統的和文脈と漢文脈との葛藤が展開されているといえよう。

次の第三文にも、前文と同じように「きんれん金激漚」「ぎよくれいろう玉玲瓏」「ことういす孤燈一穗」といった漢詩文的な審美的な語句が使用され、連合関係としての漢詩文のジャンルの記憶は残存する。しかし結合関係としては、前文とはかなり異った統辞機能があらわれることになる。傍線を附した、「初は」——「はつは這初

め、「中頃は」——「這込み」、「終に」——「這上る」といったところには、明らかに時間の推移とともに変化する月光の動きを捉えようとする表現意識があらわれている。つまり時間の推移と月光の変化をあらわす言葉の対関係が、この文を統辞しているのである。

「這初め」「這込み」「這上る」という述語群は、月の光を擬人化するものであり、当時の漢文体を基礎にした翻訳表現における、西欧的な擬人法の浮上（山田美妙などが多用した）と見ることもできよう。いわば連合関係を支える伝統的な諸テキストと、結合関係を支える新しいテキストとの葛藤、対立が生じており、いわば新旧文体が相互に拮抗する一文なのである。明治の「文明開化」を担った知識人たちの教養は、主要には漢籍の学習によって培われた。そうした漢学知識人たちが、漢文的教養を媒介として、西欧の新しい「文明」を日本に移入したのであり、そうした時代状況そのものがここでは文体化されているといってもよい。

さらにこの一文で表現されている、月の光の変化は、それまでの和歌的あるいは漢詩的表現における静的な風景の切り取り方に対して、風景を動的なものとして把握しようとする表現意識が発動した証しとして考えることができる。詩的同時性、空間性に対し、物語の継起性、時間性が作動しはじめたともいえよう。この後の描写は、風が吹くことで瞬間瞬間微妙に変化する景を捉えるものになっていく。

この第四文にあらわれてくる「夕顔の影法師」「露の珠」、第五文の「虫の音」といったディテールは、その前の「月」と「竹」とを考えあわせると、明らかに「源氏物語」の夕顔の巻で、源氏と

夕顔が見つめる庭の景を構成する素材の組合せと照応している。その意味では、こうした文体の生成とともに、結局は引き裂かれてしまう恋の物語が、動きはじめているといえなくはない。

そして第四文の冒頭は、「涼風一陣吹到る毎に」といった漢詩文的表現で導入されながら、ただちに「ませ籬に」(五音)「よろほひ懸る」(七音)「夕顔の」(五音)という和歌の音数律に接合し、その後は名詞や副詞における漢語的表現と、形容語や述語における和語が混在する文(あるいは漢字とルビ)になっていく。

いずれにしても、伝統的、古典的な文学諸ジャンルから引用された語句(あるいはその組合せ)は、たった一語(一切片)であったとしても、そのジャンル全体の記憶を導き出す。こうしたジャンルの記憶は、一方でそこにおける文体的特質を、語彙における連合関係と、統辞機能における結合関係の両面において、テキストの表層に喚起することになる。ある文体的特質は、かつてそれが位置していたテキストの物語の型の記憶をも同時に喚起することになる。なぜなら、ある文体的表徴に誘われて浮上する、それを解読するためのコードは、その文体的特徴が属していたテキストを認知することによって初めて作動するからである。

文体的表徴は、常に物語の表徴として機能する。あるジャンル(あるいはテキスト)に属する文体が選ばれた瞬間、そのジャンル(テキスト)のコードに属領化された物語が始動するのである。

先行あるいは同時代のテキストから、ある切片を引用する書き手は、かつて(あるいは今)そのテキストの読者であった(ある)わけだし、引用することによって、彼は、そのテキストとこれか

ら自らが生み出そうとするテキストとの引張り合い、相互干渉作用の場に踏み込んでいく。それと同じように、テキストの読者もまた、読むことによって、同じ相互作用の場に、しかし書き手自身がくり出してくるテキストとの葛藤をも含めた場に参入することになる。

先の引用部を読む読者は、ここまでのところは、それぞれの文に対しては一応既知のジャンルのコードを働かせて解読すればよかった。五つの文はそれぞれ、いわゆる「文学」的装いを凝らした、理想的で審美的な景を提示するために機能しているかに見える。それは第五文で明示されるように、かつてどこかで眼にしたことのある、理想的な男女の間における恋愛場面を演ずるに、最もふさわしい「あはれに面白い」「景色」なのである。そう語り手は読者に確認している。同時代の立身出世型の書生小説や政治小説の中に、いくらでも見つけ出せそうな、その意味ではそれぞれの文としては類型的で無葛藤な表現なのである。

しかし一文一文が無葛藤で類型的であったとしても、それらが組合せられ、ある序列を与えられ、構成されることによって、全体の物語線には異質なジャンルに属する線分としての一文一文相互の葛藤が生じてしまう。一文としては既知のジャンルの規範に属領化された表現は、異質なジャンルに属する別な流れに分流することで非属領化されていくのである。この庭に出る月の景の描写には、いわば景の創造と破壊が、その瞬間的変量として刻印されているといえよう。

二

創造したものは、ただちに破壊する。一定の流れを持ちはじめた表現は、ただちに別な異質な流れに合流させる。これが『浮雲』というテクストが、自らの物語を始動させていくときの、運動法則であるらしい。先の引用部は、ただちに、次のような流れに接合される。

とはいへ心に物ある兩人の者の眼には止まらず唯お勢が口ばかりで

「ア、佳こと」

トいつて何故ともなく莞然と笑ひ仰向いて月に観惚れる風をする

其半面を文三が窺むが如く

眺め遣れば眼鼻口の美しさは常に異つたこともないが月の光を受けて些し蒼味を帯んだ瓜実顔にほつれ掛つたいたづら髪二筋三筋扇頭の微風に戦いで頬の辺を往来する所は慄然とするほど凄味が有る 暫らく文三がシケムと眺めてゐるト頓て凄味のある半面が次第に此方へ捻

れて……パツチリとした涼しい眼がデロリと動き出して……見とれてゐた眼とピツタリ出逢ふ 螺の壺々口に莞然と含んだ微笑を細根大根に白魚を五本並べたやうな手が持てゐた団扇で隠蔽して耻かしさうなしこなし 文三の眼ハ俄に光り出す

「お勢さん